第十講　小説その3　日常と非日常

烈(はげ)しい西風が目に見えぬ大きな塊(かたまり)をごうっと打ちつけては、またごうっと打ちつけて皆痩(や)せこけた落葉木の林を一日苛(いじ)め通した。木の枝は時々ひゅうひゅうと悲痛の響きを立てて泣いた。短い冬の日はもう落ちかけて黄色な光を放射しつつまたたいた。そうして西風はどうかするとぱったり止んでしまったかと思うほど静かになった。泥をちぎって投げたような雲が不規則に林の上に凝然(じっ)とひっついていて空はまだ騒がしいことを示している。それで時々は思い出したように、木の枝がざわざわと鳴る。世間が俄(にわか)に心ぼそくなった。

お品はまた天秤(てんびん)をおろした。お品は丈の短い天秤の先へ木の枝でこしらえた小さな鍵の手をぶらさげて、それで手桶(ておけ)の柄をひっかけていた。お品は百姓の隙間(すきま)には村から豆腐を仕入れて出ては二、三か村を歩いてくるのが例である。手桶で持ち出すだけのことだから資本(もとで)も要らない代わりには儲けも薄いのであるが、それでも百姓ばかりしているよりも日毎に目に見えた小遣い銭が取れるのでもうしばらくそうしていた。手桶一提(ておけひとさ)げの豆腐ではいつもの所をぐるりと回ればきっとなくなった。帰りには豆腐の壊れでいくらか白くなった水を捨てて天秤は軽くなるのである。お品はいつでも日のあるうちに夜なべに縄になう藁(わら)へ水を掛けておいたり、落ち葉をさらって見たり、そこらここらと手を動かすことを止めなかった。天性(ね)が丈夫なのでお品は仕事を苦しいと思ったことはなかった。

A<u>それがこの日は自分でもひどく厭(いや)であったが、</u>冬至(とうじ)が来るから蒟蒻(こんにゃく)の仕入れをしなくちゃならないといって無理に出たのであった。冬至というと俄商人(にわかあきゅうど)がぞくぞくと出来るので急いで一遍歩かないと、その俄商人に先を越されてしまうのでお品はどうしても凝然としてはいられなかった。蒟蒻は村にはないので、仕入れをするのには田圃(たんぼ)を越えたり林を通ったりして遠くへ行かねばならぬ。それでお品はその途中で商いをしようと思ってこの日も豆腐を担いで出た。あいにく夜から冴えきっていた空には激しく西風が立って、それに逆らって行くお品は自分でひどく足下のふらつくのを感じた。ぞくぞくと身体が冷えた。そうして豆腐を出すたびに水へ手を刺しこむのが、震えるように身にしみた。かさかさに乾燥いた手が水へつけるたびに赤くなった。ひびがぴりぴりと痛んだ。懇意(こんい)なそこここでお品は落葉を一くべ焚(た)いてもらっては手をかざしてやっと暖まった。蒟蒻を仕入れ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

て出た時はそんなこんな暇をとっていつになく遅かった。お品は林をいくつも過ぎて自分の村へ急いだが、疲れもしたけれどものういような心持ちがして、いくたびか路傍へ荷をおろしては休みつつ来たのである。

お品は手桶の柄へ横たえた竹の天秤へ身をなげかけてどかりと膝を折った。ぐったりなったお品はそれでなくてもみじめな姿がさらにしどけなく乱れた。西風の余波がお品の後ろから吹いた。そうして西風は後ろで括った汚い手ぬぐいの端をまくって、油の切れた埃だらけの赤い髪の毛をこきあげるようにしてその垢だらけの首筋をむき出しにさせている。それと共に林の雑木はまだ持ち前の騒ぎを止めないで、路傍の梢がずっと撓ってお品の上からそれを覗こうとすると、後からも後からも林の梢が一斉に首を出す。そうしてしばらくしては、また一斉に後ろへぐっと戻って身体を横にゆさぶりながら笑いさざめくようにざわざわと鳴る。

お品は身体に変態を来したことを意識すると共に恐怖心を抱きはじめた。三、四日どうもなかったのだから大丈夫だとは思ってみても、こう凝然としていると遠くの方へ滅入ってしまうような心持ちがして、普段からいくらか逆上性でもあるのだが、そう思うと耳が鳴るようで世間がかえって静かになってしまったように思われた。ふと気が付いた時お品ははきはきとして天秤を担いだ。林がつきて田圃が見え出した。田圃を越せば村で、自分の家は田圃のとりつきである。青い煙がすっとのぼっている。お品は二人の子供を思って心が躍った。林の外れから田圃へおりる所はわずかに五、六間であるが、勾配の峻しい坂でそれが雨のあるたびにそこらの水を集めて田圃へ落とす口になっているので自然に土がえぐられて深い窪みが形づくられている。お品は天秤を斜めに横へ向けて、右の手を前の手桶の柄へ左の手を後ろの手桶の柄へ掛けて注意しつつおりた。それでもほとんど手桶一杯になりそうな蒟蒻の重量は少しふらつく足を危うく保たしめた。やっと人の行き違うだけの狭い田圃をお品はそろそろと運んで行く。お品は白茶けたほど古くなった股引へそれでも先の方だけ継ぎ足した足袋をはいている。大きな藁草履は固めたように霜解けの泥がくっついて、それがぼたぼたと足の運びをさらに鈍くしている。狭く連なっている田を縦に用水の堀がある。一、三株比較的大きな榛の木の立っている所にわずか一枚板の橋が斜めに架けてある。お品は橋の袂でちょっと立ち止まった。そうして近づいた自分の家を見た。村は台地にあるのでお品の家の後ろはすぐに斜めに田圃へずり落ちそうな林である。楢や雑木の間に短い竹が交じっている。いい加減大きくなった楢の木は皆葉が落ち尽くしているので、その小枝を透してくぼんだ棟が見える。白い羽の鶏が五、六羽、がりがりと爪で土を掻っ掃いてはくちばしでそこを啄いて、またがりがりと土を掻っ掃いては

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

余念もなく夕方のえさを求めつつ田圃から林へ帰りつつある。お品は非常な注意をもって斜めな橋を渡った。四足目にはもう田圃の上に立った。その時は日はとうに没して見渡す限り、田から林から世間はただ黄褐色（おうかっしょく）に光ってそうしてまだ明るかった。お品は田圃からあがる前に天秤をおろして左へ曲がった。自分の家の林と田との間には人の足跡だけの小径（こみち）がつけてある。お品はその小径と林との境を仕切っている牛胡頽子（うしぐみ）の側に立った。鶏の爪の跡がそこの新しい土を掻き散らしてあった。お品は土を手で集めて草履（ぞうり）の底でそくそくとならした。お品の姿が庭に見えた時には西風は忘れたように止んでいて、庭先の栗の木にぶっかけた大根の乾びた葉も動かなかった。白い鶏はお品の足下へちょろちょろと駆けて来て何か欲しそうにけろっと見上げた。

B<u>お品は平常のように鶏などへ構ってはいられなかった。</u>お品は戸口に天秤をおろしていきなり、

「おつう」と呼んだ。

「おっかあか」とすぐにC<u>おつぎの返事が威勢よく聞こえた。</u>それと同時に竈（かまど）の火がひらひらと赤くお品の目に映った。朝から雨戸は開けないので内はうす暗くなっている。外の光をみていたお品の目にはすぐにはおつぎの姿も見えなかったのである。戸口からではおつぎの身体は竈の火を覆（おお）うていた。返事すると共に身体をねじったのでその赤い火が見えたのである。

（長塚　節「土」）

問１　傍線部Ａ「それがこの日は自分でもひどく厭（いや）であった」とあるがそれはなぜか。次のうちから、もっとも適当なものを一つ選べ。

①　冬至が近づくと俄商人が現れるので、彼らに先を越されると予想したから。
②　二人の子供だけを残して行商に出るのが、この日に限って不安であったから。
③　はげしい西風が吹き、それに逆らって行くと、足がふらつき、体が冷えきってしまうから。
④　豆腐の水へ手を入れるたびに、冷たさがふるえるように体にしみて、手のひびも痛くなるから。
⑤　生まれつき丈夫なので仕事は苦しいと思わなかったのに、この日は体の調子がおかしいと感じたから。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問２　傍線部Ｂ「お品は平常のように鶏などへ構ってはいられなかった」とあるが、お品はふだんどのように鶏に接していたと思うか。次のうちから、もっとも適当なものを一つ選べ。

①　お品はつねに鶏をわが子のようにかわいがっており、その成長を楽しみにしていた。
②　お品は母親として子供のことだけしか念頭になく、鶏にはいつもあまり構っていなかった。
③　行商のため、外出しがちであったお品は、鶏などはいつも子供まかせで構っていられなかった。
④　お品は鶏が寄ってくると、いつもは何か声をかけたり、餌（えさ）をやったりしていた。
⑤　お品はいつも鶏の世話をしており、盗まれたり行方不明になったりするのをたえず恐れていた。

問３　傍線部Ｃ「おつぎの返事が威勢よく聞こえた」以下の場面の説明として、次のうち、どれが最も適当か。一つを選べ。

①　若いおつぎの元気な姿を表現しており、疲れたお品との対照が新鮮な印象を与えている。
②　母親の帰宅を待ちかねていたおつぎのはずんだ返事が、明るい雰囲気をかもし出している。
③　おつぎの元気な返事とともに、暗い情景に明るい火が現れたことで場面の印象が鮮明になっている。
④　お品が無事帰ってきたので、かまどの火を前にして明るく叫んだおつぎの心情がよくでている。
⑤　威勢のいい返事とかまどの赤い火とが対照的に描かれており、暖かい一場面を構成している。

問４　本文全体についての説明として、次のうち、どれが最も適当か。一つを選べ。

①　すぐれた農民文学の冒頭にふさわしく、苛酷（かこく）な自然とたたかいながら生きる農婦のけなげな生活ぶりが、力強く写実的に描かれている。
②　西風の吹きすさぶきびしい自然を背景に、苦しい労働に耐えつつ、身体の変調におびえる農婦の生活を、親子の情愛をおりこみながら巧みに描き出している。
③　きびしい自然と貧しさのなかにあっても、母が子を思い、子が母を気づかう人間的な深い情愛が、平和な農村風景を背景に叙情的に美しく描かれている。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④　とくに技巧を用いることなく、冬の自然と農民生活をそのまま綿密に描写しており、小説の一節というよりも記録文の典型とでもいうべきものになっている。

⑤　冷たい西風が吹きつける冬の日暮れからはじまるところに、春も夜明けもはるかに遠い絶望的な農民の生活と心情が鮮やかに描き出されている。

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●長塚節＝ながつか　たかし（一八七九〜一九一五）
↓農民作家・農民歌人として知られる。また正岡子規の正統後継者とも評される。

語句

擬人法＝ぎじんほう↓人間ではないものを人間であるかのように表現する技法
擬態語＝ぎたいご↓事物の様子を感覚的あるいは音に聞こえるように表現したもの・オノマトペ
対照＝たいしょう↓対比・コントラスト　（例）対照的な姉妹だね
対象＝たいしょう↓対象物・オブジェクト
対称＝たいしょう↓図形的につりあう・シンメトリー　（例）左右対称・線対称
俄か＝にわか↓急に・突然
懇意＝こんい↓親しく交流している

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）ヒツウな叫び声を上げる　①火　②被　③秘　④誹　⑤悲

（イ）体はジョウブな方だ　①婦　②負　③歩　④夫　⑤普

（ウ）彼とはコンイな間柄です　①意　②位　③委　④居　⑤衣

（エ）イセイのいい返事が聞こえる　①意　②威　③射　④畏　⑤猪

（オ）坂のコウバイがきつい　①廃　②這　③背　④配　⑤買

次の語句の意味として最も適当なものを、次の各選択肢から選びなさい。

（カ）俄かに

①いそいで　②変則的に　③突然に

④四方八方に　⑤利己的に

（キ）しどけなく

①しどろもどろに　②髪や服装が乱れて　③わざとらしく

④ごく自然に　⑤取り乱して

（ク）持ち前

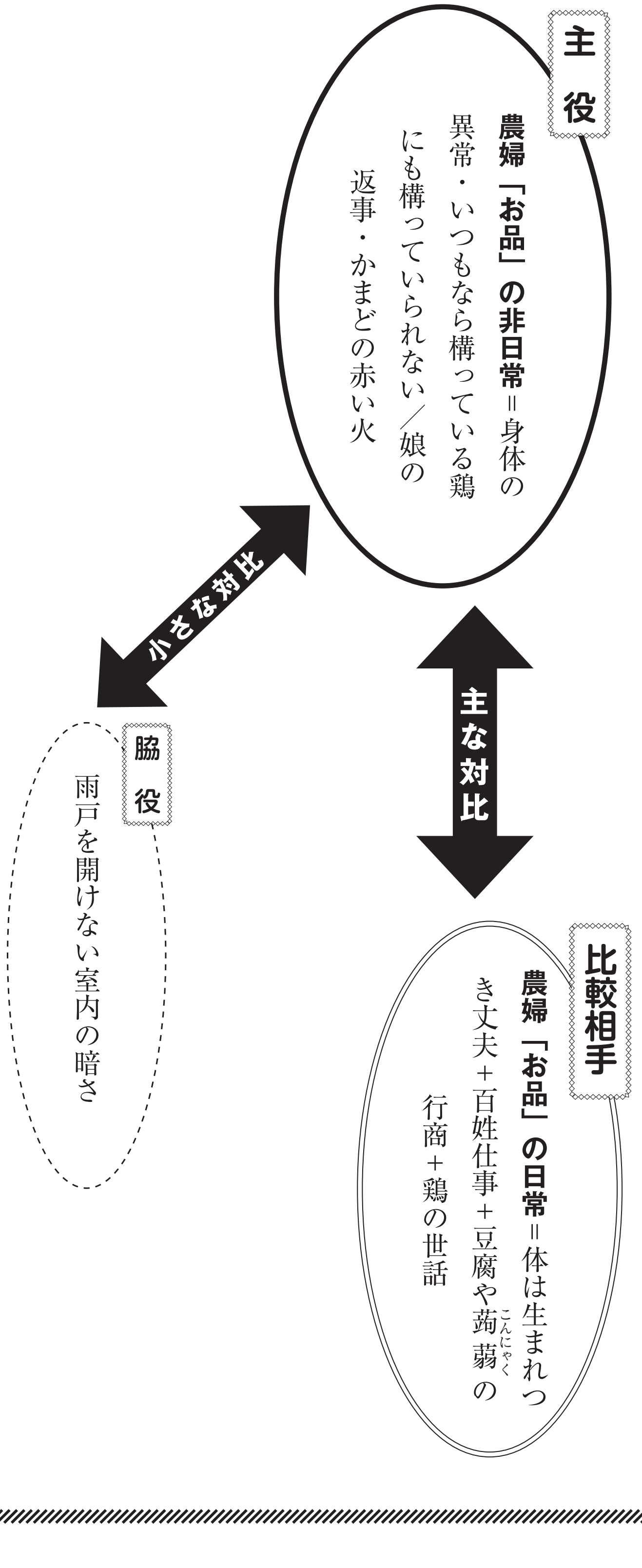
①相手と分かち合っているもの　②おとどけ品　③もともと持っている性質

④相手から勝ち取ったもの　⑤変化しないもの

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十講　小説その3　日常と非日常

《本文の対比構造》



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

この日の特別ぶり、非日常さをもたらしたものが何であるのか原因・理由を問うています。第五段落にあるとおり「身体に変態を来した」ことです。したがって⑤が正解。①の「冬至が近づく」「俄商人が現れる」は毎年のこと、つまり日常です。もし「いやー、今年はついに冬至が来なかったねぇ」なんてことがあったら、ビックリだよ。これは対比混乱の誤りです。②「子供だけを残して行商」もいつものことです。この日の不安は体調ですから記述に反するといってもよいですし、対比混乱の誤りと呼んでもOKです。③と④の「はげしい西風」も「豆腐の水〜冷たさ」も冬の日常でしょう。百歩譲って、この日に限って西風がこたえる、水が冷たいとしてもそれは体調異変の結果であって、原因・理由ではありません。したがってこれらも対比混乱の誤りです。哲学者のニーチェも言ってますよ、〝人は肝心なところで原因と結果をとりちがえる〟ってね。

問２《傍線部説明・選択肢》

打って変わって日常を問うています。つくづく入試問題というものが、つまり「読解力」を問うということが、対比関係をとらえているかどうかに集約されることがわかります。さて、本文のお品は、この日の身体異常でいつもならできていることができないわけですから、いつもは鶏の世話をしていたはずです。②③は記述に反しており、④が正解です。①は鶏とわが子とを同じレベルにしていますが、これが誤り。この日の緊急事態で、お品がその名を呼んだのは娘の名前だったことが肝心です。鶏の名前を呼んだりしたら（コッコちゃーんとか言って）、たまげます。こんな微妙に見える選択肢においても「対比」という目で見ることができれば、クリアにカットできるのです。つまり対比混乱の誤り。⑤は鶏を放し飼いにしている事実に反します。つまり記述に反する誤りです。また「たえず」は不当な全称判断とも言えます。

問３《傍線部説明・選択肢》

お品の心理描写ですよ。体調不良でなんとか帰宅して、娘がいてくれた安堵感から、威勢よく「聞こえた」わけです。物理的に「〇〇ホーン」「〇〇デシベル」で測れる声の大きさではありません。また暗い室内と明るいかまどの火が見事な対比・

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

対照・コントラストになっています。したがって③が正解。①は「若さ・元気さ←→疲れ」という勝手な対比を持ち込んでいますね。正しい対比喪失の誤りの典型です。②と④は物理的スリカエです。娘がうれしさのあまりいつもより大声で叫んだかのようになっています。⑤は同一性分断の誤りです。「威勢のいい返事」と「かまどの赤い火」は同じグループです。

問４《主題理解と表現の特徴・選択肢》

①の「写実的」、④の「とくに技巧を用いることなく」が、しらじらしーと叫んでしまいそうな間違いです。本文では「西風が～林を苛め」「木の枝は～泣いた」「林の梢が～笑いさざめく」というように擬人法（人間ではないものを人間であるかのようにたとえる）という表現技法を多用しています。ほんとに笑ったら怖い！　オカルトか！　こういうわけで記述に反するといってもよいですし、比喩を文字通りに解釈した誤りといってもよいでしょう。③は「母が子を思い」が×です。これでは子供のことを心配する母親の話になってしまいます。本文では、体調異変の自分への救いを求めるように、わが子の名を呼んだのです。記述に反する誤りです。⑤は「夜明けもはるかに遠い絶望」が×です。雨戸を開けない室内の暗さを勘違いしたような選択肢です。かまどの火も娘の声も希望を表しますよ。したがって記述に反する誤りです。

模範解答
問１＝⑤　問２＝④　問３＝③　問４＝②

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題解答　第十講

（ア）⑤　（イ）④　（ウ）①　（エ）②　（オ）④
（カ）③　（キ）②　（ク）③

解答漢字一覧

（ア）悲痛　（イ）丈夫　（ウ）懇意　（エ）威勢　（オ）勾配

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。